

箕面地区教職員組合の公開質問状に対する回答

生命機能研究科・教授 仲野 徹

質問1 大阪大学における教職員の業務負担増について

所信表明に書きました5つのテーマのうちの4番目「生産性の高い組織」が、これにあたります。委員会、会議の削減と効率化をとっかかりに、他にも無駄を徹底的に省き、教職員の負担軽減を図ります。これには、教職員の意識改革も必要です。「忙しさ」に逃げ込むのではなく、積極的にそれをなくす方向へと断固として進めてまいります。

目標は、5時に帰宅、です。そんなこと不可能と思われるかもしれませんが、できると考えています。いや、そうせねばなりません。ある研究によると、午後7時までに帰宅できるかどうか、が幸福度におおきく影響するそうです。また、それくらいまでに帰ることができる、さまざまなことを考える時間の余裕ができます。それが、大阪大学の将来に必要なだと考えています。

ウソだと思われるかもしれませんが、完全でないとはいえ、私自身が実行していますから、間違いありません。これについての私の考えは、『かわろう！大阪大学』のHPに書き綴っておりますので、5月10日の『「金持ち」よりも「時間持ち」』(<https://handainakano.jp/2021/05/10/210510/>)をぜひお読みください。

目指すのは、教職員が5時に帰ることのできる大阪大学、そして、教職員および学生の誰もが、共に信頼し合い、遠慮や忖度なしでフランクに意見を交わすことのできる大阪大学です。

非常勤職員の5年雇い止めについては、実感として望ましくないと考えています。さらには、10年雇用による終身雇用のルールもあります。これについても、大学というシステムには望ましくないといわざるをえません。一方で、大学の財源が限られているという問題もあります。現時点では、申し訳ありませんが、そのバランスをどのようにとることができるのかを判断できる材料を有しておらず、明確にお答えすることは困難です。ただ、もし総長に着任いたしましたら、この点につきましても、最大限の配慮を払うことはお約束いたします。

質問2 外国語学部、言語文化研究科、日本語日本文化教育センターの位置づけ

これは、他の学部や研究科、センターでは、あまり考えられていない問題ではないでしょうか。統合から14年たった今も、こういう質問が出されること自体、当事者以外にはわからない何かがあるのかと感じています。なので、どうお答えすべきか悩むところであります。

外国語学部および日本語日本文化教育センターについては、それぞれの部局の意向が最大限に活かされるべきだと考えています。すくなくとも、私が知る限りでは、大阪大学全体の理念や方向性と十分に合致すると判断いたしておりますので、それを維持してまいります。

言語文化研究科に関しては、文学研究科との統合による人文学研究科が2022年に発足することから、新しい発展があるだろうと期待しています。一方で、それにより、大阪外国語大学以来の伝統が薄まっていってしまうのではないかという危惧もすこし抱いております。それが杞憂になるよう、関係各位が努力されることと存じますが、もし職責につけましたら、さらに良い方向に進めることができるよう、サポートさせていただく所存であります。